



makeke

肉奴隷だった。

気が付くと私は……

さい げん なし


際限無の 変態ワールド



- 基本23枚+差分 (擬音・SS) **107**枚
- 手描き動画
- 執拗なアナル責め

トータル





……そう、今の私は晴彦の母親代わり。
だから、私のオッパイをあげるの。
乳離れがまだ済んでいない晴彦に為に。

「美味しいよ、お姉ちゃん」
「……あ、ありがとう、晴彦」

……何も間違っていない……何も。
なのに、どうして……。
どうして、こんなにも変な気分なの。



『射精管理』：だっけ？

夢精して、布団を汚さないように
する為の母親の仕事：だったはず。

でも何故だろう…
私、凄く興奮している。

……母親役に徹しないとイケないのに。





ちんぽ
ちんぽ
ちんぽ
ちんぽ

ちんぽ
ちんぽ
ちんぽ

んぽ

ぽは




後片付けが楽になるようになるように
精液を口で受ける、だったわね。

……うっ、

嫌いという程じゃないけれど、
慣れが必要な味かな。
それにちよっとオシッコ臭いかも…。

……いつもやっている事なのに、
私ったら今更、何を戸惑っているのかしら。
こんなんじゃ、母親役が務まらないじゃない。





射精管理が終わったなら性教育の時間…ね。
間違いが起こらないように
お尻するのが一般的…だったわね。

実際に見たことはないけれど、やり方なら大体解かるわ。
……っというか毎日している事なのにどうしたのよ、私。

ほら、晴彦が入れやすいようにお尻を広げて

……ああっ、もう！

膝が笑い始めた。

……一体、どうしちゃったのよ。

ちゃんと性教育できないと、母親役失格じゃないの。





……痛い！

痛い！ 痛いいいッ！

……何、この痛み！

それに吐き気がするような酷い背徳感。

毎日やってることなのに、まるで勝手が分からない。

どう喘げばいいの？ 何て声を上げれば良いの？

……分からない。全く頭が回らない。

……っていうか、お尻でセックスして

してイイものなの？



違っッ！

私、セックスした事なんて
一度もない！

嫌ッ！

私の初めてが、お尻なんて。

……何でこんな。
なんでこんな目に私が……。
誰か、これは夢だといって！



……思い出した！

ここはフアントムの世界で、

本当の世界なんかじゃない！

嫌ツ！！

ベランダへは行きたくない！

また私の記憶がリセットされちゃう！

……ああッ、お尻を突かないで！

これ以上は進みたくないのッ！

お願い、もう私を解放してえ！





イキたくない……。
いったらまた記憶が消えちゃう。

……堪えるのよ。

そう、こんなの全然気持ち良くなんかない。
そう思い込むのよ、私。

そして、この世界から脱出する方法を探すの。

イカない……

絶対にイクもんか……



……家政婦の正装とはいえ、
この格好は何か落ち着かないわね。

「お姉ちゃん、凄く似合っているよ」


「……あ、有難う……晴彦」

不意打ちで、嬉しい言葉を掛けなくてよ、晴彦。
身体が反応しちゃうじゃないの……。
このエプロン、ちよっとサイズが小さくて
色々と見えちゃってるんだから。

……まあ、家政婦の正装なんだから
仕方がないのだけれど。

でも、興奮しちゃっているのを悟られるのは、
家政婦としては流石にマズイわ。





今の私、アソコか……丸見えなのよね。

……さ、さっさと、シンクの掃除を片付けないと
色々イヤバイかも。

……で、でも本音をいうと、

悪くない……かしら。

……ああ、もうお！

私ってばナニ、露出狂みたいに興奮しているのよ！
平常心よ、平常心。



……ちよ、ちよっと、晴彦。
そこは、お尻よ…何を…

……ああ、そうね。

晴彦は、私のお尻で遊ぶのが好きだったわね。
遊び相手をするのも家政婦の仕事。

今は手が離せないから、お尻で遊んでて
……いい、いいわ…よ。





ひぐうッ!!

……が、我慢、我慢よ！
ぜ、全然……平気い……だ……わ。

……これ……粒々が付いた……ヤツ……ね。
よりもよって……なんで……
……そういうのを入れる……の……かしら。
お尻が……バカになっちゃう……じゃない。





んほおおおお

——ッ!!


無理ムリむりいいいッ!!

……壊れる

お尻、壊れちゃう——ッッ!!







……思い……出した。

ここは……本当の世界……じゃない。

以前は……母親代わりだったのに……。

どんどん状況が……酷くなってきてる……。

……ここから逃げなきゃ。

……でも、どこへ逃げるの？

……もうすぐ記憶が消えるのに？

ああ……目の前が……白く

……つ、次の私は何になるのかし……ら






……せ、**性処理**係って、
思っていたより……良い……わね。

自分でしなくても……こうやって、
気持ち良くしてくれる人が……いるんだから。

……こ……んなに気持ちいい思いして
いいの……かしら。





……や、やばい……かも。

……これ、絶対ハマる……ヤツ。

……こんなのレイプ同然なのに……
……か、身体が喜んじゃってる。

……だめえ……もつと酷い目に遭わせて
欲しいって私、思っちゃってる。





……これが性処理係…なのね。

毎日、穴という穴を犯されて
飛び散った精液を綺麗になるまで
クチで掃除をする…。

……これが…これが、これからもずっと続く…のね。

私の意志に関係なく、毎日…。

……ああ、夢なら覚めないで欲しい。

……永遠にずっと。



おめえん
たのん
たのん

はぁん

はぁん

キキ

「おかえりなさいー！」

「私の方の準備は、もう出来ているわ。」

「さあさあ、早く特訓しましょ。」

「私、晴彦に満足して貰えるような
立派な**肉奴隷**に早くなりたいの。」







「ストレッチはもう終わっているから、遠慮なくやっちゃっていいわよ。」

「今日も張り切ってるね、お姉ちゃん。」

「だって、そろそろフィストぐらいは覚えておきたいじゃない？」

「随分とハードルを上げてきたね。」

「大丈夫よ毎日、自主トレもやってるし。」

「お姉ちゃんみたいに熱心な肉奴隷の主人になれてとても鼻が高いよ、僕。」

「私は、晴彦が望むような完全な肉奴隷になりたいの。」

「早く晴彦のやりたいことを

全部、叶えられる身体になりたいのよ。」





「ふふっ、これはまた随分と立派なお尻になったね、お姉ちゃん。」

「……あ、有難う。
褒めてもらえて嬉しいわ、晴彦。」

「僕も嬉しいよ、お姉ちゃん。
こんなになるまで、頑張ってくれたのだから。」

「……じゃあ、ご褒美をあげないとね。
どつちに欲しい、お姉ちゃん？」

「……イ、イジワルしないで、晴彦。」

「ゴメン、ゴメン、
こんな熟したアナルを前に愚問だったね。」



「は、入ってくるう。」

「凄いよ、お姉ちゃん。」

「全然、力を入れていないのに指先が第一関節まで埋まっちゃった。」

「……は、はうん。」

「……じゃあ、一気にいくよ？」

「覚悟してね、お姉ちゃん。」

「き、来て、来て、早く来てえ。」





ズブツ

「……ぐわんぐわん。」

「どんどん入るよ、お姉ちゃん。
まるで底なし沼みたいだ。
お尻って開発すると、
こんなにもトロトロなるんだね。」

「……あ、ああ…あが。」

「あはは、僕の声が届いてないみたいだね。
お尻に手を突っ込まれて夢見心地だなんて、
お姉ちゃんはまだ何処に出しても
恥ずかしくない、立派な肉奴隷だよ。」





「お姉さん……♡お姉さん。」

「お姉さん、お姉ちゃん、気持ちいい？」

「お姉さん……♡お姉さん……」

「あははは、ちゃんと人間の言葉を喋ってよ。じゃないと、キツイのイクよ？」

「お姉さん……♡お姉さん……」

「あははははははは。」





「ご主人様、ご主人様あ。」

「どうかしたかい？」

「みんな、舞を見て変な顔をしているににや。」

「……舞、どつか変かにや？」

「ハハハツ、違うよ、舞。」

「あまりに舞が可愛らしいから、みんな戸惑っているんだよ。」

「にやあんだ♪」

「じゃあ…舞、

尻尾を振って

皆さんにご挨拶しようか。」

「にやん♪」







「じゃあ〜」

「いいよ、いいよ、舞。」

その調子で、どんどんアビールンン。」

「じゃん、じゃあん〜」

「凄く可愛いよ、舞。」

「じゃああん〜」

「もうみんな、舞にメロメロだよ。」

「じゃはっ〜」





「にゃん！」

「みんな、舞に夢中だよ。
もっと、もっと尻尾を振って
ここにいる全員を舞の虜にするんだ。」

「にゃん！」

「にゃああん！」







「ご主人様あ、そろそろ交尾して欲しいにゃん。
子宮が子種欲しいって、ウズウズしているにゃん。」

「頑張った舞にご褒美をくださいにゃん。」

「……じ、焦らさないで欲しいにゃん。
次の命令なら、ハメながらでお願い……にゃん。」

「……ご、このままだと、
本当に……どうにかなりそう……にゃん。」





「あああん、やっと来たにやん。

……早く、それをブチ込んで欲しいにやん。」

「前戯なんか必要ないにやん。

舞のアソコは、もう充分に濡れ濡れにやん。」

「……さあ、ひと思いに、

舞のアソコを突き壊して欲しいにやん。」

「舞が泣き叫ぶぐらい

激しく犯して欲しいにやん。」





「きもちいいいいッー！

きもちいい！

きもちいいいいッー！」

「ごろしてッー！

私をこのまま…このまま

チンポで突き殺してえッー！」















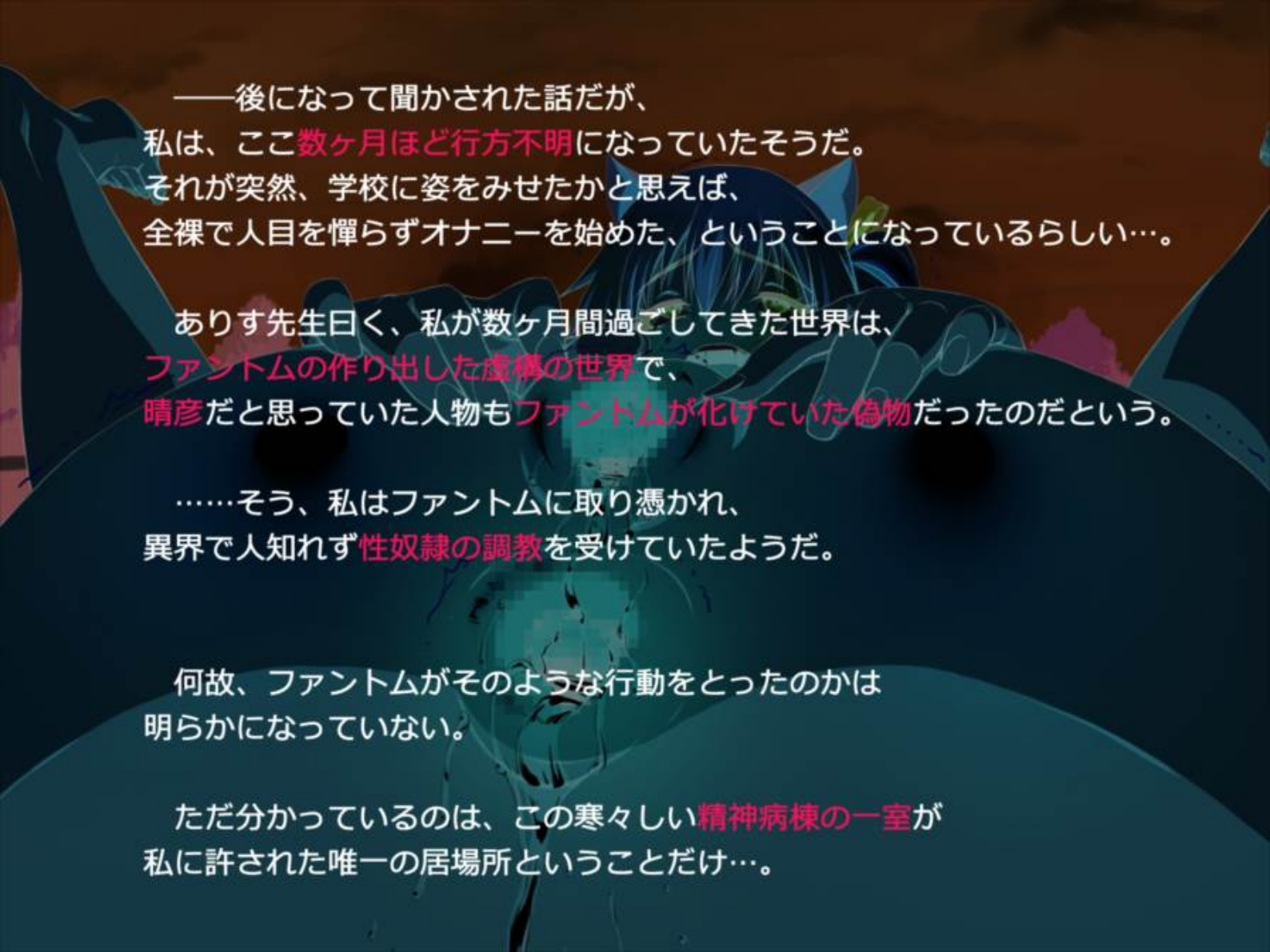
「ご主人様あ、舞のアソコ、
全然満足してないにゃん。」

「早く、続きして欲しいにゃん。」

「ご主人様あ、何処にいったにゃん？」

「他の男と交尾してもいいのかにゃん？」

「……ねえっ、晴彦ったらあ。」



——後になって聞かされた話だが、
私は、ここ数ヶ月ほど行方不明になっていたようだ。
それが突然、学校に姿をみせたかと思えば、
全裸で人目を憚らずオナニーを始めた、ということになっているらしい…。

ありす先生曰く、私が数ヶ月間過ごしてきた世界は、
ファントムの作り出した虚構の世界で、
晴彦だと思っていた人物もファントムが化けていた偽物だったのだという。

……そう、私はファントムに取り憑かれ、
異界で人知れず性奴隷の調教を受けていたようだ。

何故、ファントムがそのような行動をとったのかは
明らかになっていない。

ただ分かっているのは、この寒々しい精神病棟の一室が
私に許された唯一の居場所ということだけ…。